

an.D

新しい住まいと暮らしの情報誌 by Daiwa House

〔アンディ〕 vol.12 2015

特集 神のデザイン



特集

GOOD DESIGN

神のデザイン 自然に学ぶ家づくり

公共施設から個人邸まで幅広い設計を手がける建築家の鈴木エドワードさん。
自然や宇宙の神秘にも深い造詣を持つ鈴木さんに、理想とする建築や、
人と自然、住まいの在り方についてお話を伺いました。

建築家・鈴木エドワードが 誕生するまで

美しいものを自らの手で生み出すことに惹かれ、建築家を志したと語る鈴木エドワードさん。代表的な作品には、JR東日本さいたま新都心駅や警視庁宇田川派出所といった公共施設から下鴨の家（個人邸）、セルペンテ（別荘）まで、さまざまな建築物があります。

そんな鈴木さんが手本とするのは「GOOD DESIGN」[※]、つまり神のデザインだと言います。自然科学を探究することから湧き上がった思いが、建築家の道標になりました。そこに至る道程には一体何があつたのでしょうか。

ものづくりのルーツは幼少期にさかのぼります。埼玉県の新荷山公園に生まれた鈴木さんは、緑豊かな環境のもとで育ちました。また、自動車関係の職に就いていた両親の仕事場にはさまざまな道具類があり、それらを使って、森で拾った丸太などに細工をして遊ぶのが日課だったそうです。

配送の仕事をしていた母に連れ



られて東京都内の高級住宅街を訪れる機会も頻繁にありました。車窓から眺めた優雅な家々の様子は、すっかり鈴木少年の心を釘づけにし、「将来は大統領になつて、こんな官邸に住みたい」という壮大な未来図さえ描かせたのです。

美しい建物への憧れは大人になつても消えず、自然と建築家の道を歩むことに。ハーバード大学大学院を卒業後、尊敬する巨匠・丹下健三さんの設計事務所を経て、1977年、29歳で独立。鈴木エドワード建築設計事務所を開設しました。それから40年近くの時間が過ぎた今も建築への興味は尽きない、笑顔で語ります。

※ GOODとGOODを掛けた造語

PROFILE

鈴木 エドワードさん

建築家、鈴木エドワード建築設計事務所代表。1947年埼玉県生まれ。ノートルダム大学、ハーバード大学大学院アーバンデザイン建築学部卒業。1974年バックミンスター・フラー&サダオ、イサム・ノグチスタジオ、1975～1976年丹下健三都市建築設計事務所を経て、1977年鈴木エドワード建築設計事務所設立。公共施設から個人邸、集合住宅まで幅広く手がけ、グッドデザイン賞、エコビルド賞など数々の賞を受賞。科学、原子構造、哲学、形而上学などにも造詣が深い。

感動をもたらす 建築をつくりたい

「関わる人を少しでも幸せにする建築をつくるのが私の仕事」。鈴木さんは、建築を通じて人々に小さな感動を与えることをめざします。「例えば駅舎なら、毎朝通勤通学で利用する人がほんのひと時でも心地良く感じるようなものをつくりたい。住宅なら、なおさらです」。

家は長ければ24時間を過ごすものであり、住む人にとって最も居心地のいい場所であればならないというのが鈴木さんの持論です。生活そのものを楽しみ、心身ともに安心できる場であればならないと考えています。

若き日は建築物としての見た目の格好良さに力を注いでいたこともあったそうですが、現在は「見えるものより、見えないもの」だと鈴木さんは考えます。大切なのは、その場の空気感や家族同士の距離感、つながり。特に成長段階の子どもには、暮らす環境が遺伝をしのぐ影響を与えるとも言われています。愛情の感じられる環境で育つことは、何ものにも代えがたい成長の糧となるのです。

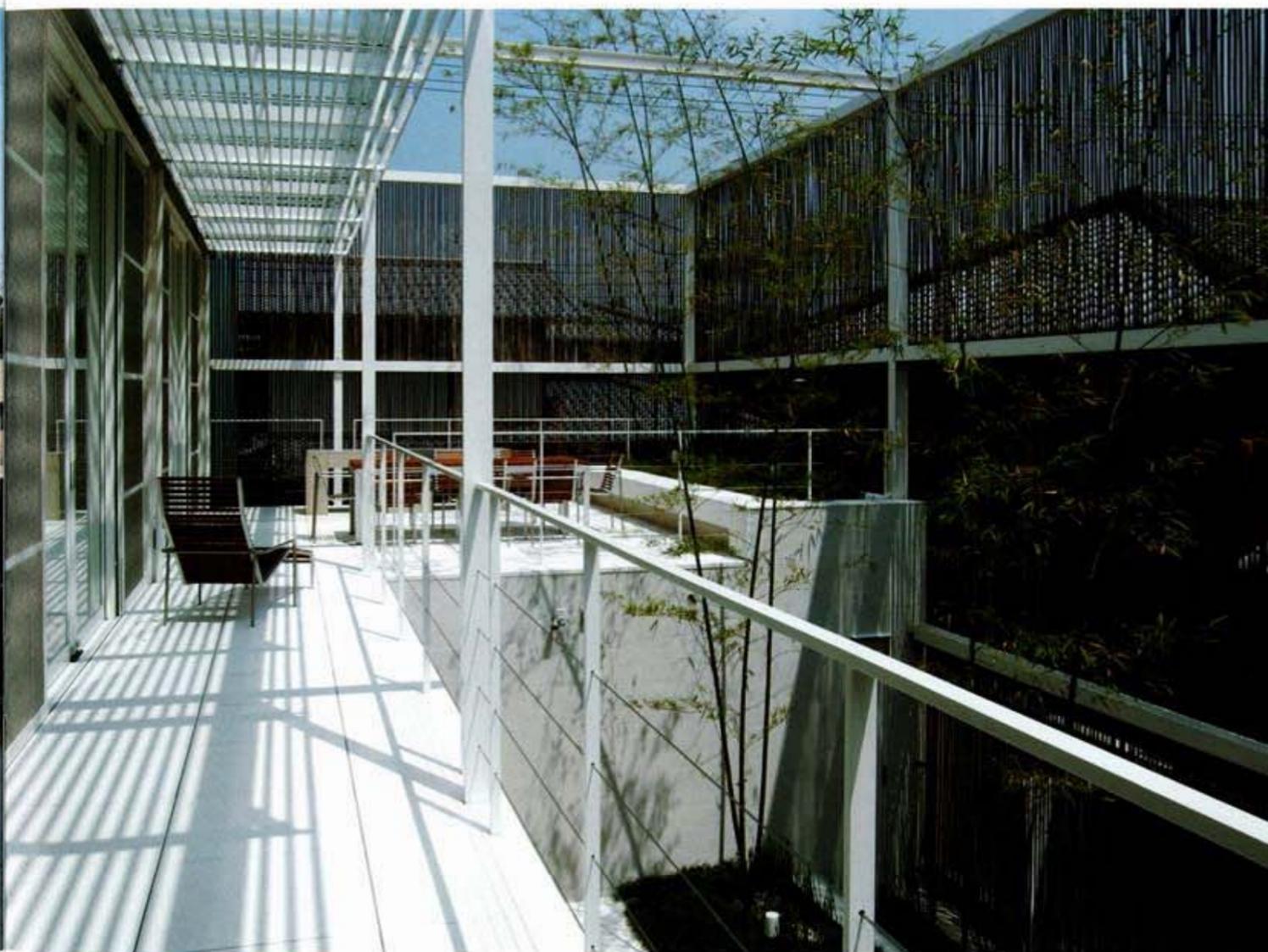
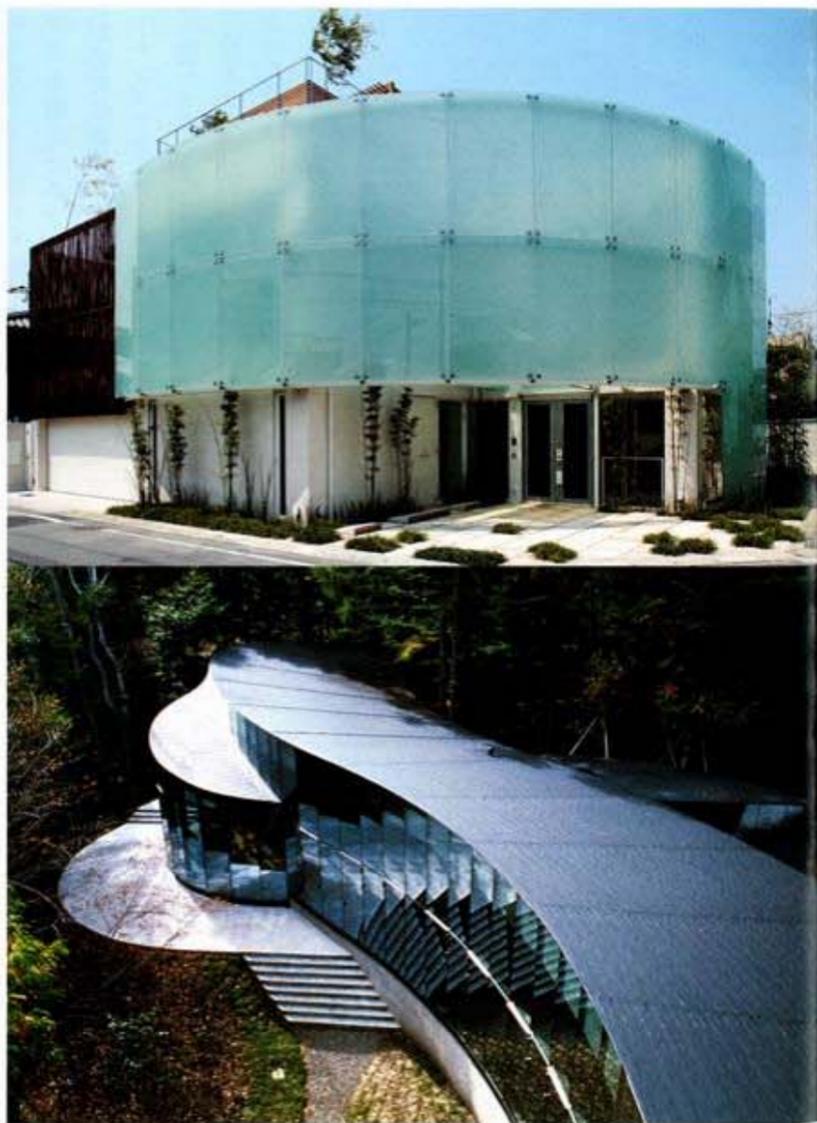
外と内のつながりから 生まれる心地良さ

鈴木さんは「インターフェース」をテーマに、居心地の良い住環境を追求しています。この言葉は建物の外と内の中間領域を意味しており、そこに一種のスクリーンやグリーンを置く考え方です。スクリーンがゆるやかな仕切りの役目を果たしながら、風や光を通し、自然とのつながりをかなえる。広い庭をとれず、外に大きく開くことができない住宅密集地の住まいにおいても、インターフェースはとて有効です。

20年来このテーマを追求してきて気づいたのは、伝統的な日本家屋に存在する「縁側」がまさにインターフェースだということ。外でも内でもない縁側は、夏と冬で上手に空間を使い分けるための古くからの日本の知恵です。他にも庇や通風の仕組みなど、日本家屋には自然とともに生きるたくさんの工夫があり、それらの原理を現代的に生かして用いることが大切だと鈴木さんは語ります。



- 3 警視庁宇田川派出所
Udagawacho Police Box (1985年、東京都渋谷区)
- 4 JR東日本 さいたま新都心駅
JR Saitama Shintoshin Station
(2000年、埼玉県さいたま市)
- 5 インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢
International School of Asia, Karuizawa
(2013年、長野県北佐久郡軽井沢町)



- 1 下鴨の家 / House in Shimogamo (2006年、京都府京都市左京区) 燻煙割竹の縦格子、フロストガラスといった「インターフェース」のスクリーンが特徴。外と内の境界域を和らげ、プライバシーを保っている。日本家屋から学んだサステナブルデザインを盛り込んだ作品
- 2 セルペンテ / Serpente (1987年、長野県北佐久郡軽井沢町) 俯瞰すると大蛇 (Serpente) が獲物を飲み込んだ姿を連想させる。南側全面が鏡面仕上げで、地上から眺めると林や空を反射して姿を消すようにデザインされている



自然こそが 神のデザイン

建築だけでなく科学にも造詣が深い鈴木さんは、宇宙の成り立ちにも興味を持ち、物理学や哲学などへ研究対象を広げています。さまざまな本を読み、独学でそれらを学んでいく中で、到達した結論の一つが「自然は神がつくった最高のデザイン」だということでした。現在地球上に存在するすべての自然物は、いわば進化の過程の頂点に位置するもの。長い宇宙の歴史の中で発生し、磨かれて、生き続けてきた種に他なりません。何億年という時間が生み出した自然の原理から、私たち人間は本当に学ぶことがあると言います。

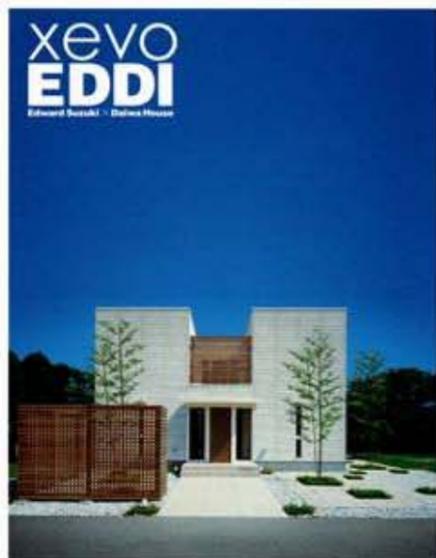
また、人間そのものが自然の営みの一部であり、神のつくったデザインであると考えられることもできます。宇宙を構成する一つの要素として、少しでもポジティブな存在でありたいと願い、自らの信念に基づいて生きる鈴木さん。その手から生み出される建築物に、人や自然への愛情が漂うように感じるのは、決して偶然ではないでしょう。

多様な価値観を 認める社会を

鈴木さんは子ども時代にインターナショナルスクールに在籍し、国籍や文化や宗教に関係なく平等な人間関係を築くことを学びました。今も当時の仲間たちとは連絡を取り合う仲で、顔を合わせては「すべての人が私たちのような子ども時代を過ごせば、世界から戦争はなくなるだろう」と語り合うそうです。

そうした経験を生かして次世代の世界のリーダーを育てたいと、2014年に軽井沢に設立された全寮制インターナショナルスクールの立ち上げにも関わってきました。校舎はもちろん鈴木さんの設計。豊かな自然に包まれた環境であることから、大きなガラス窓で外と内の一体感を図ったデザインとなっています。

今、日本、アジア、そして世界から集まった一期生たちが、さまざまな壁を超えてともに学んでいます。この愛情にあふれた学び舎から、争いごとのない世界のリーダーが誕生する日を、鈴木さんは心から待ち望んでいます。



自然環境を取り入れる 鈴木エドワードさんのデザインと ダイワハウスの省エネ・高耐久の家xevoが コラボレーションしました。

日本では昔からさまざまな中間領域(インターフェース)を設けることによって自然を住まいの中に上手に取り入れてきました。xevoEDDI(ジューヴォエディ)はそうした日本の暮らしの知恵とxevoの優れた環境性能、鈴木エドワードさんのデザインが融合した住まいです。



坪庭

屋内から屋外の風景を楽しむことはもちろん、家の中に光や風を取り込む役目をする「坪庭」。日本の伝統家屋の知恵を、アウトドアパティオとして再現します。



土間

外と内の中間領域であり、屋外と同じ感覚でさまざまな用途に使えるのが「土間」の魅力。xevoEDDIでは、開放感のあるインドアパティオとして表現しました。



借景

屋外の美しい風景を住まいの一部としてとらえる「借景」の考え方。都会の住環境におけるネガティブな要素をスクリーンで遮って、空へ抜ける開放感を演出します。

